

和歌山大学における「日本語」授業を考える

－「にほんのことば・にほんのぶんか2」の授業実践例から－

A report on Japanese class in Wakayama University

長友 文子

Ayako Nagatomo

(和歌山大学教育学部助教授)

武田 文子

Fumiko Takeda

(和歌山大学システム工学部非常勤講師)

東 悦子

Etsuko Higashi

(和歌山大学教育学部非常勤講師)

横山 直子

Naoko Yokoyama

(筑波大学大学院生)

1. はじめに

1.1. 留学生の多様化と日本語教育

日本への留学生受け入れについては、1983年に、政府が留学生10万人計画を出し、その結果、年平均16%の増加率で留学生が増え、1995年には、全国で留学生の数が53,847人となった。その後はアジア経済の低迷とともに、留学生数は頭打ちとなっていたが、留学生を増やそうとする政府の新たな施策やアジア経済の回復などで、近年、留学生は再び増えてきている。

和歌山大学でも、1983年に留学生の数は2人だったが(注①)、1996年に59人となり、交換留学生制度の拡充などによって留学生が増加し、2002年度の和歌山大学の留学生数は、過去最高の96名になった。

それに伴い、いろいろな問題が増えてくるのは仕方ないことであろう。一つの問題が解決しないまま、新たな問題が起こったりしている。たとえば、宿舎やビザといった生活上の問題もその一つであるが、日本語教育についても、日本語クラスが留学生の質・量の増加に対応できていないなどの問題が起こっている。

日本語教育の側では、これらの問題への対応策として、複数の補講授業や新しい授業科目の開設を行うなど、問題解決への努力をしてきた。

本稿では、それらの対応策のうち、新しく開講された「にほんのことば・にほんのぶんか1・2」の授業の経緯、報告を行う。

1.2. 留学生の種類と日本語能力

和歌山大学に限らず、日本の大学には多様な留学生がいる。留学費用の種類で分けると、「私費留学生」「国費留学生」「政府派遣留学生」「県費委託留学生」などとなる。また、身分の種類で分けると、「正規学部留

学生(以下、4年以上学部在籍し規定の単位を取得して卒業する者を「正規学部留学生」という)」「短期学部交換留学生」「県費委託留学生」「学部研究生」「学部聴講生」「大学院生」「大学院研究生」「大学院聴講生」があり、近年では特に短期学部交換留学生が増加している。またこの他に、教育学部では、毎年数名の「教員研修生」をひきうけている。

本学の場合、それらの留学生の日本語能力を、日本語能力試験の級に照らしてみると、次のようになる。(日本語能力試験の各級の内容等については、注②参照)

「私費学部留学生」: 日本に最低1年は住み、日本語能力試験1級に合格して、和歌山大学の私費外国人入学試験に合格している。日本語能力は高い。

「政府派遣学部留学生」: マレーシアからの留学生で、経済学部、システム工学部に在籍。本国で2年間日本語を学習して、日本語能力試験2級を受験し、日本へ留学するために文部科学省が設けた試験を受験している。私費留学生に比べると日本語能力は低い。

「国費学部留学生」: 大阪外大、東京外大、三重大学の留学生センターで、1年間(学部生)または半年間(院生)日本語教育を受けている。日本語能力試験は受ける必要がなく、仮に受けたとしても3級程度であり、和歌山大学に来る国費留学生は、日本語能力が高くない。

このように、正規学部留学生の間にも、日本語能力試験の1級に合格した留学生(私費)から、3級にも合格できないような留学生(国費)まで、レベルにかなりのばらつきがある。

「委託留学生(県費留学生)」: 主に北米や南米の日系人で、和歌山大学に1年間在籍して専門の勉強をする。日本語のレベルは、国籍や年度によって様々である。1級を合格している者もいれば、4級程度の者も

いる。

「教員研修生」：大阪外大や三重大の留学生センターで半年日本語教育を受けている。研修のために和歌山大学に1年間在籍するが、日本語能力向上が主目的ではないため、日本語能力試験は受けておらず、日本語能力は3～4級程度で、低いレベルでばらつきがある。

「学部・大学院研究生」：学部、大学院とも、日本滞在歴や日本語学習歴により、4級を受験する能力がない者や1級を合格している者など、日本語レベルは様々であり、中にはほとんどゼロの者もいる。

「短期交換留学生」：和歌山大学に1年間在籍し、授業に出席することになっているが、日本語学習歴は様々で、日本語レベルは1級を合格している者や4級程度の者までいる。単位が必要でありながら、授業を聴講することがほとんどできない者もいる。

交換留学生は、これまでにオーストラリア、タイ、アメリカ、中国、韓国、フランスなどから来ている。海外との協定大学が増えているので、今後和歌山大学では、日本語がほとんどできない短期交換留学生が増え続けるであろう。そのことによって、単位取得など、様々な問題が生じることが予想される。

1.3. 日本語教育

現在、和歌山大学で開講されている日本語関連の授業は次の通りである。

- ①正規学部留学生1年生用：「日本語Ⅰ」
- ②正規学部留学生2年生用：「日本語Ⅱ」
- ③正規学部留学生用：「日本事情」
- ④主としてその他の留学生用：「にほんのことば・にほんのぶんか1・2」

正規学部留学生（私費留学生、政府派遣留学生、国費留学生）は、上の①、②の授業が必修となっている。彼等は日本人学生と同じように、他の講義も受講しなければならない。「日本語Ⅰ」、「日本語Ⅱ」では、学部留学生が一般の日本人学生と同じように講義が理解できる能力をもつことを目標としている。

その他の留学生用には、2001年度までは、単位の出ない補講クラスとして「基礎日本語入門」週1回（90分1コマ）が開講されていた。この授業は、主に「正規学部留学生」以外の単位を必要としない留学生を対象にしていたので、単位の出ない授業であった。

しかし、ここ数年、「正規学部留学生」以外の留学生が増加し、また、正規学部留学生でも、上記日本語のクラスについてゆけずに、「基礎日本語入門」に出席するケースがあった。そのため、このクラスを受講する学生の日本語能力には、全く話せない者を含め非常にばらつきが生じた。

また単位が出ない授業であったため、毎週、学生の数が様々であったり、学期の途中で全く見たことのない留学生が授業に出てきたりすることもあって、真

面目に出席している学生にも、また教師にとっても、大変迷惑であった。

逆に、「基礎日本語入門」のクラスの授業内容が簡単すぎる学生や単位を必要とする短期交換留学生などが、正規学部留学生用の授業に出席するので、①②の授業も、レベルが落ちることになり、本来の目標をなかなか果たすことができなかった。

そこで、このような問題を解決するため、非常勤講師を認めてもらい、2002年度から「基礎日本語入門」にかえて、全学部留学生用の単位も出る科目として、「にほんのことば・にほんのぶんか1・2」が開講された。

以下、④の「にほんのことば・にほんのぶんか1・2」のクラスについて、報告する。

2. 「にほんのことば・にほんのぶんか1・2」について

2002年度から新たに開設したのは、次の科目である。

「にほんのことば・にほんのぶんか1」 前期
 「にほんのことば・にほんのぶんか2」 後期

実際に開講してみると、シラバス作成時に予想していなかったことも少なくなく、結果的にシラバス記載されている通りの授業を行うことが困難となった。

第一に、旧「基礎日本語入門」を引き継いだこの科目は、日本語レベルの低い学生用のクラスとして開設したつもりであったが、＜全留学生履修可能、単位取得可能＞ということで、多くの留学生が受講を希望し、受講者は、合わせて30名をこえた。

第二に、同じ理由で、日本語レベルの高い者も単位のために履修を希望したので、受講者には、日本語レベルの高い正規学部留学生から日本語がほとんどできない研究生まで、日本語レベルに、旧「基礎日本語入門」以上に大きなばらつきが生じた。

そのため、教師1人で担当した前期「1」では、かなりの無理が生じた。一方で、基礎的な文法や漢字、語彙のきめ細やかな指導は困難となって、低いレベルの学生は授業が理解できず、他方高いレベルの学生にとっては、単位を取るのには楽だが、物足りない授業となった。

こういった問題をふまえて、後期の「にほんのことば・にほんのぶんか2」では、14名の受講者を能力別に3つのグループに分けた。（最初の履修登録者は20名であったが、他の授業と重なってどうしても受講できない学生、途中で来なくなった学生がいた。）

グループA：日本語が全くできないアメリカからの学生1名。

グループB：日本語学習歴1ヶ月から3ヶ月程度の中国人3名。

グループC：日本語学習歴約1年以上の学生10名。担当の長友に加え、本校非常勤講師の東、武田、筑

波大学大学院修士課程地域研究科日本語コースの横山が、協力者として参加した。

担当者と協力者とは、毎週1回長時間にわたり、授業についての検討会を開き、授業の進め方や、学生指導の方法、教材や教授法について詳しく検討した。また、月2回の勉強会を行い、日本語教育についての理解を深めた。

3. 「にほんのことば・にほんのぶんか2」授業の報告

以上の検討会での共同研究をもとに、「にほんのことば・にほんのぶんか2」の授業を進めた。以下は、グループABCごとの授業の報告である。

グループA：東悦子

グループB：横山直子

グループC：武田文子

3.1. Aグループにおける授業実践（東）

3.1.1. 学習者について

Aグループの学習者1名（以下、学習者Aとする）は、和歌山大学経済学部への交換留学生として、2002年10月に来日したアメリカ人であった。自国の大学での日本語学習経験は全くなく、しかも日本での滞在予定期間は3ヶ月という比較的短いものであった。このような状況から、学習者Aの場合、「にほんのことば・にほんのぶんか2」の授業において、既に日本語学習経験のある、他の受講生に加わることは無理であろうと判断された。したがって、指導形態としては、担当教師とのマン・ツー・マン方式が選ばれた。そして、学習内容に関しては、学習者の滞在期間が短いことも考慮したうえで、日本での生活上、すぐに役立つと考えられる日本語を身につけることを目的とした、いわゆる「生活日本語」を取り扱うこととした。学習者Aに関する略歴および日本語学習プランを表1.にまとめる。

表1. 学習者Aに関する略歴と学習プラン

国籍	アメリカ
学習者の来日目的	異文化に触れる・日本語を学ぶ
滞在予定期間	2002年10月～12月*
学習者の母語	英語
学習者が話せる外国語	スペイン語、フランス語
日本語学習歴	なし
在籍身分	国費留学生・交換留学生
所属	経済学部
授業時間数	10月4日より30時間
授業形態	担当教師とのマン・ツー・マン方式
授業目的	日常生活に必要な日本語を身につける

※その後、滞在期間は学習者の希望により延長された。

3.1.2. 学習内容について

まず、授業の方法であるが、学習開始当初は、学習者の母語である英語が媒体言語として使用されたが、次第に日本語だけで授業が成立するようになり、学習者からの質問に対して、理解語彙の範囲では説明ができない場合にのみ、英語が使用されるようになった。また、授業の進度に関しては、学習者Aの理解状況に応じて進められたが、毎回必ず、既習事項の復習といくつかの新しい文型の導入がなされた。次に、授業内容の実際を「会話練習」と「文字学習」の2点から具体的に振り返ってみる。

a. 会話練習

まず、「会話練習」で取り上げた材料であるが、初級日本語学習者用の3冊のテキスト（以下、1）～3）に記す）の内から、学習者Aにとって生活上役立つであろうと予想されるトピック〔話題〕を含む課（①～⑤）が選ばれた。

1) 『初級日本語「げんきI」』

①「あいさつ」 ②第1課「あたらしいともだち」

③第2課「かいもの」

2) *SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE*

④ Lesson 2「郵便局で」

3) 『みんなの日本語 初級I』

⑤第5課

これらの材料に含まれるトピックの種類は、「あいさつの言葉」をはじめ、「自己紹介」や「かいもの」など、合計12種類であった。指導語彙のカテゴリーは、「家族」や「数字」など18種類で、学習語彙数を合計すると257語となる。3ヶ月間の授業で取り上げたトピックを関連項目ごとにI～IVにまとめ、使用テキスト、指導文型例、そして、指導語彙のカテゴリーとその語彙数を表2.「学習項目」に示す。

次に、「会話練習」の進め方の例を挙げる。例えば、使用材料1)①では、「おはようございます」や「はじめまして」など18語のあいさつ言葉が、その状況を表す絵とともに提示されており、それを用いて、あいさつ言葉の発音や使用場面を確認した後、学習者と教師の間で、発話場面を想定して会話練習を行った。また、使用材料1)③では、千、万単位の数字の言い方や「これ、それ、あれ」などの指示語、および「くつ」、「じてんしゃ」といった物の名前を、絵や実物を用いて導入した後、「これはいくらですか。」「それはさんぜんえんです。」などの文型練習に進んだ。また、同じ文型で次々に単語を入れ替えて文を作る練習〔代入練習〕などを十分に行い、文型の定着を図った。最終的には、テキストに提示されている買い物場面のダイアログ〔対話練習〕を練習した後、学習者と教師で店員と客の役割を決め、絵や実物を利用した役割練習に発展させた。

表 2. 学習項目

	トピック(テキストの種類*)	導入文型(代表例・各3例)	指導語彙の種類(例語)と語彙数
I	あいさつの言葉(A) 自己紹介(A) 家族(A)	① ~は~です。 ② ~はなんですか。 ③ (~さん)の(家族)は(職業)です。他2文型。	あいさつ(おはよう他)18語・国(アメリカ他)6語・専攻(けいざい他)4語・仕事(いしゃ他)8語・家族(おとうさん他)2語
II	時刻表現(A) 電話番号(A) 歳(A)	① (場所)はいまなんじですか。~じです。 ② (人)のでんわばんごうはなんですか。~です。 ③ なんさいですか。~さいです。	数字(いち他)26語 時間(いちじ他)33語 年齢(いっさい他)12語
III	かいもの(A) レストランで(A) 郵便局/本屋/デパートで(B)	① ~はいくらですか。~えんです。 ② (場所)へいきます/きます/かえます。 ③ (人)が(物)をかいます。他5文型	指示語(これ他)11語・たべもの(そば他)6語・もの(かさ他)16語・数字(せん他)26語・動詞(だします他)11語・郵便(こづつみ他)4語・その他(どうも他)24語
IV	乗り物(C)	① どこ[へ]もいきません/いきませんでした。 ② (乗り物)でいきます/きます/かえます。 ③ いつ、なんで(手段)だれと、どこへ。	時間表現(こんげつ他)26語 乗り物(しんかんせん他)9語 その他(どうりょう他)15語
計	12トピック	19文型	18種類・257語

※ (A) : 初級日本語『げんき I』 (B) : *SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE* (C) : 『みんなの日本語 初級 I』

b. 文字学習

「文字学習」では、テキスト『かな入門 英語版』を使用した。『かな入門 英語版』は、英語話者である学習者が独習も可能であるように、ひらがなとカタカナの発音が、ローマ字で示されているテキストである。その内容の一部を紹介すると、「あいうえお」や「アイウエオ」の各音の確認から始まり、各文字で始まる単語と絵の提示、さらに、各文字の1字ずつの書き方と単語の書き方を練習する部分、そしてローマ字からひらがなやカタカナへの変換練習「かきとり」の部分で構成されている。

授業においては毎回、90分授業の内の10分から15分を上述したテキストの学習にあてた。ひらがなの「あいうえお」の読み方と書き方の練習から始めて、ひらがなの各文字で始まる語彙(例えば、あし、いけ)や長音(おばあさん等)、撥音(えんぴつ等)、促音(おっと等)、拗音(びょういん等)を含む語の発音も練習した。またひらがなが終了後、カタカナの読み方と書き方に進み、これも終了した。ただし、授業での学習だけでは、時間的にも学習の定着を図るうえでも、十分ではないと考えられたので、取り上げた文字の練習を家庭学習としても提示した。

3. 1. 3. 学習成果について

「スポンジが水を吸うかのごとく」とのたとえがあるが、その言葉通り学習者Aは、日本語学習経験がゼロの状態から始めて、学習した日本語をよく身につけていったといえよう。「会話練習」において、新出事項を正しく理解し、ほとんどの場合、正確に回答することができた。また、ダイアログにおいて、テキスト通りの練習のみならず、適切に既習の表現を取り入れることができ、さらには、日常生活の中で覚えた表現までも、授業場面におけるダイアログ学習の中

に、学習者自らが組み入れて使用することができた。時には、突然に関西弁を披露し、指導教師の笑いを誘うこともあった。学習者が、習い覚えた日本語を使うことを楽しんでいる様子が窺われた。発音面に関しては、第一回目の授業では、「らりるれろ」の発音を、[ra][ri][ru][re][ro]のように英語の[r]の音で代用してしまうことがあったが、教師が注意を促すとそれほど困難なしに矯正することができた。イントネーションにおいても、英語話者特有の不自然さはほとんど感じられないほどである。拍に関しては、「病院(びょういん)」を「美容院(びょういん)」、「おばさん」を「おばあさん」と誤ることもあった。「文字学習」においては、例えば「リ」と「ソ」のような、学習者Aにとって、認識の難しい語があったものの、これもそれほど困難なく「読み・書き」ができるようになった。

以上、学習者Aの学習成果について述べてきたが、このような学習成果の背景には、次に述べる5点の学習上の条件が影響していたと推測される。そして、それらの条件は、大きくは3つの要因としてまとめられよう。すなわち、1) 学習環境要因、2) 学習者要因、そして、3) 言語環境要因である。

1) 学習環境要因

- ①マン・ツー・マン方式で授業が行われた。
- ②媒介言語として英語が使用可能であった。

2) 学習者要因

- ①学習者には主体的な学びの態度が備わっていた。
- ②学習者は既にスペイン語とフランス語を習得していた。

3) 言語環境要因

- ①日本語を耳にする言語環境に身をおいていた。

まず、特に影響が大きかったであろうと考えられるのは、学習環境要因とした1) ①と②の2点である。つまり、学習者は、日本語が全くわからない学習当初

から、授業の中で疑問に思うことがあれば、他者に気を遣う必要なく、母語を使用して、いつでも質問することができたということである。このことが、集団学習において予想される成果よりも、学習者Aにとっては、プラスの成果が得られた主たる要因であるといえよう。

次に、学習者要因2)①に関して、学習者Aは、常に学んだことばを積極的に使用しようとし、誤りの訂正を受けた場合には、自ら「もう一度」と申し出て、練習を行ったのである。また、2)②に挙げたように、学習者Aは、母語である英語のほかにも、スペイン語やフランス語を習得しており、フランス人留学生とはフランス語で、ペルーからの留学生とはスペイン語で話すことができた。このように、3ヶ国語でコミュニケーションが図れるという能力が、日本語という外国

語の学習にもなんらかのプラスの効果を果たしていたのではないかと推測される。そして、最後に当然のことながら、3)①に挙げたように、日々、目標言語である日本語に浸されているという言語環境が学習成果に果たす役割も大きかったであろう。

3.2. Bグループにおける授業実践 (横山)

3.2.1. 学習者について

Bクラスの学習者は3名(以下、学習者B、C、Dとする)で、全員が中国から来た中国語を母語とする教育学部の研究生であった。授業時間数は合計30時間であった。クラスでは、日本語のみを使用して教える直接法が用いられたが、分からない語彙や新しい語彙は漢字を使用して説明することもあった。(表3, 4, 5を参照)

表3. 学習者B, C, Dに関する略歴と学習プラン

	B	C	D
国籍	中国	中国	中国
学習者の目的	大学学部編入(2004年度目標)	大学学部編入(2004年度目標)	大学院入学(2003年度より)
滞在予定期間	2002・5~2003・3	2002・5~2003・3	2002・10~2003・3
学習者の母語	中国語	中国語	中国語
日本語学習歴	独学(中国で一ヶ月)	独学(中国で三ヶ月)	語学学校(中国で三ヶ月)
在籍身分	私費留学生・研究生	私費留学生・研究生	私費留学生・研究生
所属	教育学部	教育学部	教育学部
授業時間数	10月4日より30時間	10月4日より30時間	10月4日より30時間
授業形態	演習講義形式	演習講義形式	演習講義形式
授業目的	4技能(聞く・話す・読む・書く)の向上	4技能(聞く・話す・読む・書く)の向上	4技能(聞く・話す・読む・書く)の向上

表4. 学習者B, C, Dが日本に来た時の日本語のレベル

学習者	読む	書く	聞く	話す
B	ひらがな、カタカナは一通りできていた。	ひらがな、カタカナを正確に書けていた。	学習したことはほとんど理解していたが、正確に理解できているか確認する必要があった。	簡単な挨拶と自己紹介ができていた。
C	ひらがな、カタカナは一通りできていた。	ひらがな、カタカナを書けていた。	間違えて理解していることがあった。	挨拶と簡単な自己紹介ができていた。
D	初級レベルのものを読むことができていた。	単語や自分で学習した表現方法を用いて、自然な表現をすることができていた。	クラス内の日本語は理解できたが、検定用のテープの速さでは聞き取れていなかった。	自己紹介ができ、短文であるが自分の意見を言うことができていた。

表5. 授業終了時の日本語のレベル

学習者	読む	書く	聞く	話す
B	日本語能力試験3級レベルのものを理解できるようになった。	文章を読んでまとめられるようになった。短文だけではなく、適度な長さの文で表現できるようになった。	教師の話すことは理解できていた。日本語能力試験4級の聴解問題はほとんど間違いなく聞き取れるようになった。	時間をかければ自分の意見をまとめて話せるようになった。教師の質問に対して素早く答えられるようになった。
C	日本語能力試験4級レベルのものを理解できるようになった。	簡単な文型を使って自分の意見を書くことができるようになった。	時々クラスメイトに確認することもあるが、教師の質問を理解できるようになった。	簡単な文型を使って日常会話を行うことができるようになった。
D	専門分野の本を辞書をひきながら読めるようになった。ところどころ誤解して解釈していることもあった。	自分の意見をまとめられるようになった。日本語らしい表現もより多くなった。	教師の話すことを理解し、日本語でメモをとりながら聞くことができるようになった。	自分の専門分野の説明を簡単にできるようになった。

3.2.2. 学習内容について

教科書として使用した『みんなの日本語 I』は、学習者の語彙を増やすため、また各課に与えられている「会話」を日本文化の説明に役立てた。クラスでは日常会話だけでなく、発表の仕方や文章の書き方なども指導した。授業の始めは文法や読解を中心に行った。その結果、読解能力はある程度向上したが、それに比べると話す・聞く能力はあまり変化がみられなかった。そのため、独学では難しいとされる、話す・聞く能力を伸ばす授業を中心とした内容に切り替えた。以下の4点(a～d)はクラスでの指導内容を技能別に記したものである。

a. 話す能力

ロールプレイだけではなく、学習者それぞれが毎週準備してきた発表を行うようにした。そして、学習者の発表に対して他の学習者に質問させるようにし、一つのテーマについてクラスで話し合うようにした。それは学習者が話す機会を多く持つのに役立った。教師は、学習者のコミュニケーション能力の育成を目指しつつ、文法上の誤用や不明瞭な発音は常に訂正するようにした。

b. 書く能力

頻繁に短い感想や、自分の意見をまとめて書かせるようにした。最後の授業の作文内容から、短時間で自分の考えをまとめて、より自然な日本語表現を用いて書けるようになったという成果が見られた。

c. 聞く能力

日本語能力試験4級のテープを使って聞き取り練習をした。試験形式で2度行った。最初の試験では、学習者はテープの内容を理解できなかった。そのため、教師は言葉の一つずつ拾いながら説明し、学習者にテープを繰り返して聞かせた。数ヶ月後に行った2度目の試験では回答にほとんど間違いが見られず、学習者は正確にテープの内容を聞き取れるようになっていた。

d. 読む能力

学習者は漢字から文の意味を推察可能なこともあり、初級レベルにもかかわらず高い内容の教材を求めていた。そこで新聞記事に語彙説明のプリントをつけて学習者に配り、自分の意見をまとめてクラス内で話合ったり、作文に書かせたりした。学習者全員が自国では教師であることから、新聞の内容は教育に関するものを選ぶようにした。

3.2.3. 学習成果について

学習者は、学習したばかりの文型や語彙を使って作文を書いたり、発表の中に取り入れたりして意欲的で

あった。また、年賀状や折り紙など日本の文化にも興味を示していた。例えば、学習者が折り紙でカメレオンの作り方を説明した発表では、非常に楽しみながら日本語を学習できたようであった。中には何度も発表をしたがる学習者もいた。しかし、最後の授業で学習者にとっての授業のアンケートから次の3点が明らかになった。

- ① 学習者は教師の日本語は理解できるが、教室外での日本語は理解できないことから、自分の日本語能力に対する不安感があった。
- ② 学習者は一つの談話に時間がかかりすぎてしまうことに歯がゆさを感じていた。
- ③ 学習者はクラスでの会話練習量を不十分だったと感じており、授業内でより多くの時間を使って話す練習を望んでいた。

①に関しては、教師の話す日本語のスピードや話し方と、日常生活で耳にする日本語の相違のために生じていると考えられる。学習者は教師と話す以外に日本語母語話者と話す機会がほとんどなかった。そのため、学習者が参加していた学部生の演習でも聞き取れない、内容が理解できないなどの問題があったようである。次に②に関しては、学習者が、頭の中で日本語を母語に、母語を日本語に転換して話すため、必要以上の時間がかかってしまうことによると推測される。日本語学習暦がそれほど長くない学習者にとって、日本語母語話者の話す日本語を聞いてすぐに理解するのは非常に難しい。特に方言や若者ことばを含んだ日本語ではなおのことそうであろう。また、学習者が母語を日本語に転換し、聞き手に話すのはそれらの学習者にとってより困難な作業であろう。最後に③について考えてみる。教師は学習者の要望を受け入れ、話すことを中心とした授業計画を立て、多くの時間をその為に費やした。しかし、学習者は学習時間が不足だったとした。これは、学習者が目指していた目標レベルまで到達しなかったことによると推測される。

では、今後、教師はそれに対して、どのように応じてゆけばよいのであろうか。

教師は、まず学習者のニーズを知る必要がある。学習者の日本語の学習目標は何なのか、一番必要とする技能はどれなのか、また、どれくらいのレベルの到達目標を持っているか、などがそれにあたる。学習者の現段階での日本語のレベルと、ニーズを考慮したうえで、教師は学習者にクラスの学習目標を明確に示すことが必要である。そして、その目標レベルまで学習者の日本語能力が到達した場合、学習者は日本語の授業に対する満足感を持ち、授業への積極的な参加にもつながるであろう。

3.3. Cグループにおける授業実践 (武田)

3.3.1. 学習者について

10名の学習者が本授業を受講した。各学習者の国籍その他の詳細を表6に示す。

表6. 学習者E～Nに関する略歴と学習プラン

	E	F	G	H	I
国籍	中国	マレーシア	ベトナム	ミャンマー	タイ
学習者の目的	単位取得	単位取得	単位取得	教員研修	日本語日本文化研究
滞在予定期間	2002.4～2006.3	2002.4～2006.3	2002.4～2004.3	2002.4～2003.3	2002.10～2003.9
学習者の母語	中国語	マレー語	ベトナム語	ミャンマー語	タイ語
日本語学習歴	2年	3年半独学	2年半	1年	3年
在籍身分	私費留学生	国費留学生	私費留学生	教員研修生	国費留学生・日本語日本文化研究生
所属	システム工学部2年	システム工学部2年	システム工学部3年	教育学部	教育学部
授業時間数	10月4日より30時間	10月4日より30時間	10月4日より30時間	10月4日より30時間	10月4日より30時間
授業形態	演習講義形式	演習講義形式	演習講義形式	演習講義形式	演習講義形式
授業目的	日常会話の上達	日常会話の上達	日常会話の上達	日常会話の上達	日常会話の上達
	J	K	L	M	N
国籍	タイ	フランス	ペルー	中国	内モンゴル
学習者の目的	勉学	勉学	経済学の勉学	大学院入学	大学院入学
滞在予定期間	2002.10～2003.9	2002.9～2003.2	2002.4～2003.3	2002.4～	2002.10～
学習者の母語	タイ語	フランス語	スペイン語	中国語	モンゴル語
日本語学習歴	3年	2年	1年	1年	1年
在籍身分	AIEJ*交換留学生	AIEJ*交換留学生	県費委託留学生	私費留学生・研究生	私費留学生・研究生
所属	教育学部	システム工学部	経済学部	経済学部	経済学部
授業時間数	10月4日より30時間	10月4日より30時間	10月4日より30時間	10月4日より30時間	10月4日より30時間
授業形態	演習講義形式	演習講義形式	演習講義形式	演習講義形式	演習講義形式
授業目的	日常会話の上達	日常会話の上達	日常会話の上達	日常会話の上達	日常会話の上達

※財団法人日本国際教育協会の略名。文部科学省の外郭機関であり、外国人留学生に対する福祉・援助事業等を行っている。

3.3.2. 学習内容について

本授業では、日常会話の上達をはかることを目標とした。特に日本人の友人とより自然に会話ができるようになることを目指した。

さまざまな学習歴、在籍身分の学習者が受講したため、Cグループの日本語能力レベルは一定ではなかった。しかし、以下の理由から、「中級レベルの後半」と設定した。

①学習者たちは日本で生活しており、日常的に会話練習ができる環境にある。したがって、文法や読解の点では初級の教科書を使用するレベルにあっても、実際の会話能力のレベルは初級以上であることが考えられる。教科書が初級レベルの学習者でも、会話能力は中級レベルの内容でも対処できると判断した。

②学習者が10名いるため、教師の説明がわからない学習者がいても、日本語能力が高い学習者が低い学習者に助言することができる。

中級以上の学習者が日本人と交流する際、滑らかな日本語を話しても、表現方法や姿勢、態度などが母国文化の影響を受けているため、日本人が違和感を覚える場合がある。

Cグループでは、学習者が日本人と円滑な交流ができるようにするため、日本人の習慣や考え、人との接し方などについて積極的に言及していく。

そこで、実践的な会話練習を行いたいと考え、二者間のロールプレイを中心とした授業を行った。取り上げたテーマは、次の4つである。

1) 「誘い」と「断り」

友人をカラオケや温泉に誘う表現と、相手の気分を害さないように誘いを断る表現。

2) その場にはいない第三者について説明する

人を表現するためのさまざまな表現。

3) 「～そうです」を使って、情報を伝達する

伝聞の「そうです」を使った表現。推量の「そうです」との使い分け、パターン練習。

4) 「謝罪」と「赦罪」

友人に謝る表現と、それを許し、関係を修復する表現。

ここでは、上記のうち学習者の反応が大きかった2)と4)の授業について報告する。

a. 2) その場にはいない第三者について

①ロールプレイ

(カードA)

あなたは今度の日曜日に京都に行きたいと思っています。友達のBさんに電話して、誘ってみてください。

(カードB)

今、国から友達が遊びに来ています。その友達が今度の日曜日に京都に行ってみたくて言っていますが、あなたはテストが近いので、勉強をしなくてはいけません。そこでたまたま京都に行きたいと考えているAさんに、友達を京都に連れていってくれるように頼んでみてください。また、そのときに、あなたの友達がいかにか魅力的でいかにか面白い人であるかということ、Aさんによく説明してください。

②「性格」「外見」「趣味」「(服装などの)好み」の各項目の、日本語表現のハンドアウトを使った説明。

③ 再びロールプレイ

(カードA)

あなたは恋人が欲しいと思っていますが、なかなかできません。どうすれば恋人ができるのか、Bさんに相談してみてください。

(カードB)

Aさんには恋人がいないので、あなたの友達を紹介してあげようと思っています。その友達はあなたの親友で、本当にいい人です。その人がどんな人なのか、Aさんに説明してあげてください。

ここで重要なのは、ことばから受ける印象についてである。例えば、「がっかりしている」という表現は、男性に言うのと褒めことばになるが、女性には使えない。「褒めことばのつもりで言ったが日本人に嫌な顔をされた」という経験を発表した学習者もいた。

最近の若者の間で流行している髪型などについて、どのように表現するのかという質問もあった。また、「石頭」や「顔が広い」など、体の部位を使った慣用表現について関心があった。

b. 4) 謝罪と赦罪の表現

①待ち合わせに遅れたときの謝罪／赦罪表現

②状況・指示の提示

『AさんとBさんは、2時に会う約束をしていました。Aさんは2時5分前に待ち合わせ場所に着きました。でもBさんはなかなか来ません。Aさんは心配になって、携帯電話に電話しましたが、電源が入っていないようです。結局Bさんは、待ち合わせに1時間も遅れて来ました。Bさんはいつも待ち合わせに遅れます。』

Aさん → どうしていつも遅れてばかりいるのか聞いてください。謝られても、すぐに許したくありません。

Bさん → Aさんは怒っています。遅れた理由を説明して謝ってください。

③シナリオの作成

国籍の違う学習者同士でペアを作り、A・Bの役を決めて謝罪／赦罪場面のシナリオを書かせる。

④シナリオによるロールプレイ

あるペアのシナリオで、Bが「大変申し訳ありませんでした」といって謝罪する場面で、学習者は謝罪の気持ちを表現するにはできるだけ丁寧なことばを使った方がいい」と考えたのであるが、友人同士の会話には過剰な敬語は皮肉表現になる場合があることを説明した。

また学習者からは、携帯電話に関する表現についての質問があり、「電波が入らない」、「電源を切っていた」、「充電が切れてしまった」などの表現の違いについて説明をした。

3.3.3. 学習成果について

中級レベル以上の多くの学習者が、「勉強してもなかなかのびない気がする」、「日本人の友人が話すような日本語を話すことができない」などの悩みをかかえている。

本授業では、学習者が学生生活をおくる上で遭遇しそうないくつかの状況を想定し、「日本人ならなんと言うか」という視点から会話を組み立てていく練習を行った。単に文型を提示するだけでなく、「日本人なら」という心理的背景も説明した。

一般的に「日本文化＝日本の伝統文化」と考えられている傾向があるが、このクラスでは、日本での生活、日本人との交流に焦点を当てた「文化」を取り入れた授業を行った。

また本授業ではロールプレイを中心に会話練習を行ったが、他にもさまざまな方法で授業を展開することができると考えられる。さらなる教授法、教材研究が望まれる。

4. まとめ

留学生の日本語教育において、1つのクラスをレベル別に分けて授業を行うという試みは、初めてのことであった。今回、このようなグループ分けが実現できたことは協力者がいたからである。

今回のグループ分けで、次のような成果があった。

まず、グループAのケース。日本語ゼロで和歌山大学に来た留学生の場合、これまでは、教員が一人だったので、マン・ツー・マンの授業はできなかった。そのため、日本語学習ゼロの学生と日本語学習歴半年あるいは1年の学習者を同じ教室で同じ授業を行うことになり、どちらかの学習者が犠牲者となって、学習効果が上がらなかった。今回、マン・ツー・マンの授業を行うことで、学習者Aに日本語能力が

いたことは、学生にとって本当に幸運であった。

次に、Bグループのケース。このグループは中国人だけで構成されていた。一つのクラスに漢字圏の学生と非漢字圏の学生が混じっていると、読解や語彙のレベルで初めからばらつきが生じているため、教材選びや教授法などで大変苦勞する。が、このように中国人だけのクラスだと、学習歴に2,3ヶ月の差があっても、クラスは比較的スムーズに行われるので、学習効果が上がった。

最後に、Cグループのケース。このクラスには様々な国籍の留学生(8カ国10名)がいた。外国人は日本滞在が長いと、読み書の能力に比べて会話力が高くなるといわれているが、このクラスはその言葉通り、話すことはかなりできた。が、日本社会にとけ込んでいないので、その話の内容がどういう背景から生じているのかという理解が不十分であり、話の背後にある文化を知りたいというのがこのクラスの強い要望であった。このグループはそういう学生の要望を入れ、会話の背景となっている日本の社会や文化を組み込んだ授業を行った結果、学生にとって満足感の得られた授業となった。

「日本語」科目は、留学生のための外国語科目として位置づけられている。だが、「日本語」が他の外国語と大きく違う点は、上に述べたように、履修する学生の国籍や日本滞在歴、日本語学習期間などによって、それぞれの日本語能力に極端なばらつきがみられることである。今回のクラスについても、20名に満たない学習者であるが、日本語のレベルはさまざまであった。

さらに、問題は狭義の語学能力だけにはとどまらない。言葉の背景には文化があり、日本語教育は同時に異文化理解教育でもある。たとえば、1つのクラスに8カ国からの留学生がいれば、そこには8つの異なった文化が存在することになるので、1つのクラスでまとめて授業を行う場合、それぞれの国の文化的背景に配慮するのは、大変困難である。

もちろん、他の外国語でも、クラスには出来る学生やあまり出来ない学生はいるであろうが、英語の場合は、中学、高校と、みな同じ条件の下で勉強してきており、第二外国語の場合はほぼ全員が初心者である。また、たいていの場合、全員が同じ日本人である。

このように日本人の外国語学習と、留学生の日本語学習には、基本的なところから違いがある。

本学の留学生は今後更に増えるであろう。

いうまでもなく、留学生を受け入れること自体は、いいことである。しかし、「国際交流」というのは、留学生の数を増やせばいいということではないはずである。受け入れる以上は、大学として責任を持てる体制を整えるべきであり、そのひとつが、留学生のための日本語教育であることはいうまでもない。

正規学部留学生のための「日本語Ⅰ・Ⅱ」科目にも、問題はなくはないが、いまは取り上げない。それより、今後の大きな課題は、正規学部留学生以外の留学生が、それぞれの能力にあった日本語クラスを自由に受講できる体制を、充実させてゆくことである。

小論が、そのために少しでも役にたってくれるなら幸いである。

参考文献

- ・『日本語教授法』 石田敏子 大修館書店 1988
- ・『日本語教育の概観』 柳沢好昭 社団法人日本語教育学会 1995
- ・『はじめての日本語教育・1 日本語教育の基礎知識』 高見澤孟他 アスク 1996
- ・『はじめての日本語教育・2 日本語教授法入門』 高見澤孟 アスク 1996
- ・『ロールプレイで学ぶ 中級から上級への日本語会話』 山内博之 2000
- ・『和歌山大学50年史』 和歌山大学 2000

《 使用テキスト 》

グループA

- ・『かな入門 英語版』 国際交流基金 凡人社 1978
- ・*SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE* 筑波ランゲージグループ 凡人社 1991
- ・『初級日本語 げんきⅠ』 坂野永理他 ジャパンタイムズ 1999
- ・『みんなの日本語 初級Ⅰ』 石沢弘子他監修 田中よね他執筆 スリーエーネットワーク 1998

グループB

- ・『絵とタスクで学ぶ日本語』 村山良子他 凡人社 1988
- ・『会話で学ぶやさしい日本語』 茅野直子他 荒川出版 1992
- ・『日本語能力試験対策 項目整理 3級問題集』 田中望監修、足立章子執筆 凡人社 1994
- ・『日本語能力試験対策 項目整理 4級問題集』 田中望監修、足立章子執筆 凡人社 1995
- ・『みんなの日本語 初級Ⅰ』 石沢弘子他監修、田中よね他執筆 スリーエーネットワーク 1998
- ・『話そう考えよう初級日本事情』 福岡日本語センター「日本事情」プロジェクト スリーエーネットワーク 2000
- ・『大学・大学院留学生の日本語②作文編』 アカデミック・ジャパニーズ研究会 アルク 2001

グループC

- ・手作り教材を使用

注① 本学における留学生の受入れは、1996年度にブラジルから1名の学生を、私費留学生として、教育学部の研究生として受入れたことにはじまる。その後留学生受入れの促進につとめた結果、留学生の受入れは、1989年以降増加している。

注② 日本語能力試験の構成及び認定基準

級	類別	時間	配点	認定基準
1級	文字・語彙	45分	100点	高度の文法(2,000字程度)・語彙(10,000語程度)を習得し、社会生活する上で必要であるとともに、大学における学習・研究の基礎としても役立つような、総合的な日本語能力(900時間程度学習したレベル)
	聴解	45分	100点	
	読解・文法	90分	200点	
	計	180分	400点	
2級	文字・語彙	35分	100点	やや高度の文法・漢字(1,000字程度)・語彙(6,000語程度)を習得し、一般的なこと柄について、会話ができ、読み書きでき、読み書きできる能力(600時間程度学習し、中級日本語コースを修了したレベル)
	聴解	40分	100点	
	読解・文法	70分	200点	
	計	145分	400点	
3級	文字・語彙	35分	100点	基礎的な文法・漢字(300字程度)・語彙(1,500語程度)を習得し、日常生活に役立つ会話ができ、簡単な文章が読み書きできる能力(300時間程度学習し、初級日本語コースを修了したレベル)
	聴解	35分	100点	
	読解・文法	70分	20点	
	計	140分	400点	
4級	文字・語彙	25分	100点	初歩的な文法・漢字(100字程度)・語彙(800語程度)を習得し、簡単な会話ができて、平易な分、または短い文章が読み書きできる能力(150時間程度学習し初級日本語コースの前半を修了したレベル)
	聴解	25分	100点	
	読解・文法	50分	200点	
	計	100分	400点	